

全学分野横断創生プログラムにおけるメジャー・マイナー制

新潟大学 副学長（学務担当）・人文学部教授 福島 治

高等教育関係者の多くが愛読者となっている誌上にて、新潟大学全学分野横断創生プログラムについて紹介する機会を得たことは幸いである。NICEプログラムという愛称で親しまれているこのプログラムは、学生自身が主体的に学びをデザインするところに特徴がある。その狙いは、混迷する社会の課題解決に貢献できるエージェンティックな人材の育成である。「知識集約型社会を支える人材育成事業」（令和二年度採択）としてこれを実施しており、関係各位の尽力により中間評価でS評価をいただいた。光栄である。八回にわたる連載により、その実情を余すところなくお伝えしたい。

第一回は、このプログラムの学内教育課程における位置づけと、その運用を支える学内状況と組織についてである。

学内教育課程におけるメジャー・マイナー制の位置づけ

本学のメジャー・マイナー制の基本構造は図1の通りである。本学のマイナーには二つのタイプがあり、パッケージ型は特定の専門分野やテーマに即して科目リストが作成され

ており、学生はそれに基づいて学修していく。一方学修創生型は、学生が自身の問題意識や興味・関心に基づいて学修計画（履修する科目、到達目標等）を作成し、学修していくものである。

マイナー・プログラムは一二単位以上で修了できることを基本にしている。卒業要件単位数（一二四単位以上）の中に含めて履修可能だ。そうした理由は二つある。一つは、卒業要件の中に含まれる自由選択科目に体系性を持たせるためである。例として本学人文学部の卒業要件単位を図中に示した。専門教育が六〇単位で、これがメジャーとなる。教養教育に関する科目は四一単位であり、英語や初修外国語、データサイエンスや大学学習法など科目区分指定のある二九単位と自由選択の一二単位がある。ほかに科目区分に関わらない自由選択も二三単位ある。したがって、計三五単位分の科目は学生自身が完全に自由に選べる。これまで学生は、その時々興味や時間割の都合等で自由選択科目を履修してきた。しかし、その科目選択にマイナー・プログラムとしての体系性を持たせることにより、学修効果が高まると考えた。

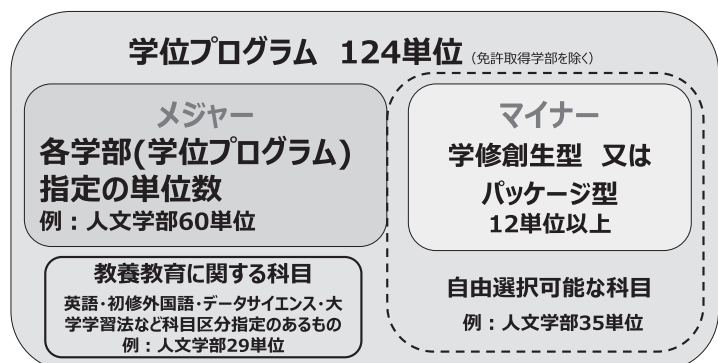


図1 新潟大学におけるメジャー・マイナー制の単位構造

りだ。専門と教養で構成される各学部のカリキュラムは、それぞれ独自に練り上げられてきたものであり、メジャー・マイナー制による履修を前提として作られているわけではない。学生はあくまで所属学部の履修要件に従って科目履修をする。つまり、

この図は各学部の要件を具体的に反映しているものではない。専門と教養のほかに、自由選択の部分で「マイナー」として体系化された学びをしましょう、そこで独自のマイナー・プログラムもデザインできます、という説明をする際に用いているものである。

卒業要件単位内に収めたもう一つの理由は、マイナー・プログラムの修了者を増やすことにある。平成十七年度から副専攻制度としてマイナー・プログラムを開設していたが、ややハードルが高かった。プログラム修了までに二四単位以上が必要であり、うち一二単位は卒業要件とは別に履修するしくみであっ

メジャー・マイナー制の運用を支える学内状況と組織

た。入学時に副専攻に興味をもって入門科目を履修する学生は毎年六〇名前後いたのだが、最後まで完遂する者は少なく卒業時には六〇名前後になった。最初の興味を維持し、修了者を増やすことが、教育戦略上の課題となっていたのである。

メジャー・マイナー制による履修者の拡大は、新潟大学の中期計画の一つにあげられている。入学者の三分の一が履修することを目指しており、これが旗印にもなっている。しかし、なかなか高い数値であり、大

上段に構えてもいられない。制度的な部分の整備を行ってきた者の一人として、これまで本学が運用してきた副専攻制度とどのように違うのか、説明や意見交換のために学部長や幹部教員との懇談の場を設け、感触をさぐりつつ、

学生のマイナー・プログラムの履修を促してもらえようをお願いをして回った。また、マイナー・プログラム履修者の動向について、全学教育組織である教育基盤機構と学部との間で情報共有をはかるため、学部別の履修者数などの情報を含むニュースレターの発行も行ってきた。学内理解を得ずして目標達成は困難であるため、情報共有には特に留意している。

組織についても触れておこう。関連組織は図2の通りである。メジャー・マイナー制を成功に導くことが本学の教育の新たなスタンダードを構築する

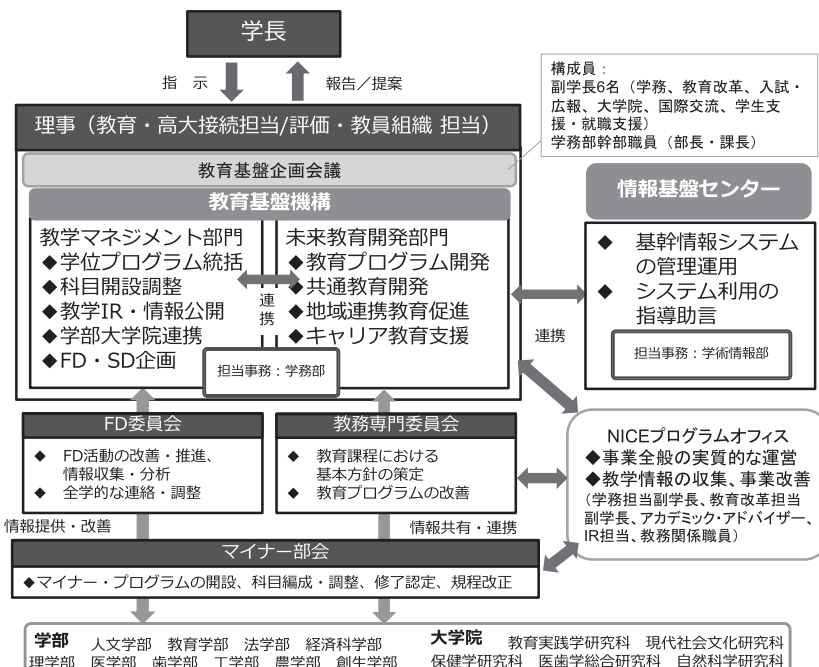


図2 新潟大学のメジャー・マイナー制を支える組織体制

ことになる。将来を見通した制度やプログラムの設計には、不断の情報収集とアイデア創出が不可欠である。教育基盤機構の「未来教育開発部門」がその任にあたっており、教育改革担当副学長が統括している。

この部門は、科目開設や履修情報管理等を担う「教学マネジメント部門」と緊密につながっており、各々の専任教員や事務職員の間々と定期的な会議はもとより随時連絡をとりあつて業務を推進している。進捗状況は定期的な教育担当理事とのミーティングで報告し、そこでの指示は直ちに業務に反映されていく。そもそも学長も理事もNICEプログラムの事業申請書に直接手を入れ、申請の段階から学びやすいマイナー・プログラムの構築と普及を願っておられた。

学部代表の集まる教務専門委員会等では、こうした執行部の姿勢や雰囲気が変わるよう努め、全学的に取り組むことの本気度を知ってもらうことにも配慮した。

教育改革担当副学長の尽力により、副専攻部会も刷新された。事業開始当初はとにかく最小限のプログラム概要や科目リストを整えて開設したマイナー・プログラムもあった。質をさらに高めるには、プログラムの科目担当者コミットしてもらうことが肝要であり、そのための組織体とそこでの情報共有が必須である。

次回以降は、高等教育政策におけるメジャー・マイナー制の立ち位置について専門的な視点から言及し、その後はアドバイザーや学修成果の可視化、質保証について実務担当者が述べた後、今後を展望する。最後までお目通しただければ幸いである。

近年の高等教育政策とメジャー・マイナー制

新潟大学教育基盤機構 准教授 斎藤 有吾

本連載では新潟大学全学分野横断創生プログラム (Niigata University Interdisciplinary Creative Education Program：通称NICEプログラム) について紹介していく。本学ではメジャー・マイナー（主専攻・副専攻）制を導入しており、NICEプログラムとは、学生のメジャー・マイナー制における学修を支援する取り組み全体を指す。

第二回は、近年の高等教育政策におけるメジャー・マイナー制の位置づけを整理するとともに、本学のメジャー・マイナー制の特徴について解説していきたい。

近年の高等教育政策におけるメジャー・マイナー制

我が国の高等教育がこれからどう変化していくのかを明らかにすることを主目的とした答申「二〇四〇年に向けた高等教育のグランドデザイン」（中央教育審議会、二〇一八a）において、文理横断教育、あるいは学修の幅を広げる教育の必要性が指摘されている。現代の学術研究と産業社会では、異なる専門分野の知識を組み合わせることが求められていることがその背景である。これに対応するた

め、一般教育・共通教育においては従来の学部や研究科の枠を超えた文理横断的なカリキュラムが必要とされ、専門教育でも従来の専攻を超えた広範囲かつ深いレベルの教育が重視されている。

簡単に言えば、広さ (Breadth) と深さ (Depth) の両立である。その教育の方法論の一つとして挙げられているのがメジャー・マイナー制である。二〇二二年六月に中央教育審議会大学分科会の中に新たに設置された大学振興部会においても「文理横断・文理融合教育」の推進が議論されており、やはりメジャー・マイナー制はその方法論の一つとして位置づけられている（中央教育審議会大学分科会大学振興部会、二〇二二）。このような動向から、今後の高等教育改革においてメジャー・マイナー制がますます注目を集めていくことが予想される。

グランドデザイン答申の用語解説によると、メジャー・マイナー制とは「主専攻分野以外の分野の授業科目を体系的に履修させる取組であって、学内で規定が整備されている等、組織的に行われているもの」（中央教育審議会、二〇一八b 傍線は筆者）をいう。

プログラムであることを示すためにマイナー・プログラムと呼称している。またその履修は選択であり、修了認定のための必要単位数は一二以上で、その単位は卒業要件に含めることができる。さらに修了が認定されれば、マイナー・プログラム修了証が授与される。

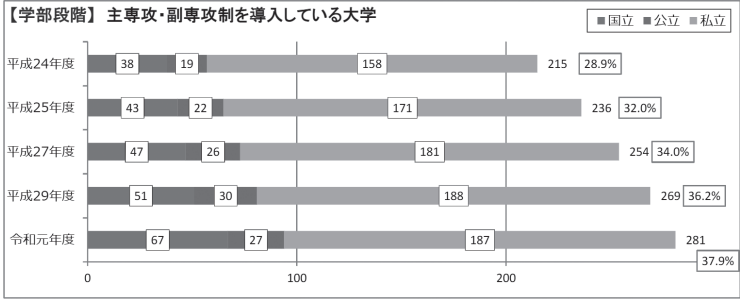
本学のマイナー・プログラム（二〇二四年度）には「パッケージ型」と「学修創生型」の二つのタイプがある（表1）。

まず「パッケージ型」は、分野やテーマごとにパッケージ化された科目リストの中から、自分で科目を選択し、計画的に履修を行うものである。修了認定のための必要単位数は一二以上を基本としている。導入大学におけるマイナーの一般的な私たちはこのタイプ

である。国立大学でメジャー・マイナー制を導入している広島大学や金沢大学でも同様のかたちをとっており、特定の学部や学問分野に紐づくパッケージ型のマイナーを展開している。このようなタイプのマイナーの多くは、メジャーの内容の一部を学修できるように編成されている、いわばミニ・メジャーである。新潟大学でもそれに該当するマイナー・プログラムが複数存在する。ただし他にも、語学、データサイエンス、地域創生等、分野横断的な、あるいは学際的なマイナー・プログラムがパッケージとして複数開設されていることが本学の特徴の一つである。

次に「学修創生型」は、本学で開講されている科目の中から適した科目を選択して学生自身がリストを作成し、オリジナルなマイナーをデザインするというものである。修了認定のための必要単位数は一四以上である。学修創生型マイナーの詳細は次回以降に譲るが、本稿では履修の流れを簡単にまとめておこう。

まずは必修科目「分野横断デザイン」（一、二年次生対象）の受講を通して、自分の興味・関心や問題意識を起点に探究課題を見つけ、マイナーとして履修する科目を選択し、履修計画を立てる。それを起点に学生はマイナーの履修を進めていく。さらにマイナーの履修終盤（終了後に、必修科目「分野横断リフレクション」（三、四年次生対象）で、自身のマイナーの学修全体をメジャーとかけあわせたかたちで振り返り、学修成果を可視化する。これら二つの必修科目で作成するマイナーの学



(※) 大学院のみを設置する大学は母数に含めない。
(※) 調査項目を隔年にしたため平成26年度、平成28年度、平成30年度は調査をしていない。

図1 メジャー・マイナー制の導入率

(出典：文部科学省 (2021)「令和元年度の大学における教育内容等の改革状況について」p.13から転載)

表1 新潟大学のマイナー・プログラムの2つのタイプ

	学修創生型	パッケージ型
プログラム開設数	1	45
科目の選び方	自分で選ぶ（自己選択方式）	科目リスト
修了認定単位数	14単位以上	12単位以上
備考	マイナー支援科目「分野横断デザイン」を受講し、科目リストを含むマイナーの学修計画書を作成する	

ハ参考文献▽
中央教育審議会（二〇一八a）「二〇四〇年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」中央教育審議会（二〇一八b）「二〇四〇年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」用語解説」
中央教育審議会大学分科会大学振興部会（二〇二二）「文理横断・文理融合教育の推進について（審議経過メモ）」https://www.mext.go.jp/content/20220921_mxt_koutou01_000025134_3.pdf 二〇二四年二月二十日確認
関西学院大学（二〇〇六）「先導的大学改革推進委託最終報告書：平成十七～十八年度文部科学省」
文部科学省（二〇二二）「令和元年度の大学における教育内容等の改革状況について」https://www.mext.go.jp/content/20211104_mxt_daiga_kuc03_000018152_1.pdf 二〇二四年二月二十日確認

メジャー・マイナー制におけるアカデミック・アドバイジング

新潟大学教育基盤機構 特任准教授
アカデミック・アドバイザー 神田 麻衣子

新潟大学全学分野横断創生プログラム (Niigata University Interdisciplinary Creative Education Program：通称NICEプログラム)では、二〇二二年度にマイナー・プログラムの開設とあわせてアカデミック・アドバイジングを開始した。アドバイジングの目的は、マイナー・プログラムを履修する学生への伴走的学修支援である。

近年、高等教育においてアカデミック・アドバイジングの導入が進んでいるが、その背景は各教育現場によって異なる。第三回では、本学のメジャー・マイナー制におけるアカデミック・アドバイジングの位置づけや体制について解説することに加え、アカデミック・アドバイジングの実践事例として「学修デザイン相談」を紹介したい。

メジャー・マイナー制とアカデミック・アドバイジング

本学で展開されているマイナー・プログラムには、「パッケージ型」と「学修創生型」の二つのタイプがある。

パッケージ型では、「法学」、「生物学」の

別支援)を行うほか、マイナー支援科目を担当して集団支援にも携わる。本稿では「学修デザイン相談」に焦点を当て、マイナー支援科目の詳細については次回に詳説したい。

(1)学生のニーズ

「学修デザイン相談」に対する学生のニーズは、大きく二つに分けられる。一つは、メジャー・マイナー制や特定のプログラムの履修資格・修了要件といった、制度に関する疑問の即時的な解決である。

もう一方は、自らの学修構想や計画に対する疑問や悩みを解消し、次のステップを見出すためのアカデミック・アドバイジングである。こうした幅広いニーズに応えるため、開設時間や場所の利便性を念頭に相談環境を整えている。

(2)相談体制

「学修デザイン相談」は、学期中の毎週火、木、金曜日の昼休み、および三、四限に開設されている。一回の相談時間は三〇分で、Aが対面で実施している。相談はメールやウェブフォームを通じて予約を受け付けるほか、予約のない場合でもAが対応可能な場合に即時受け付けている。

相談場所は、学生が気兼ねなく立ち寄れる開放感を維持しつつ、人目が気にならない落ち着いた空間でアドバイジングを受けられるよう、半オープンスペースと専用個室の二種類を使い分けている。なお、マイナー・プログラム履修に関する不安やつまずきについて対話する中で、学生が自身の「困り感」についてAに相談することもある。相談内容が

ように特定の学問分野に焦点を当てたプログラムのほか、「コミュニティ・マネジメント」や「核エネルギー・災害科学」のように、現代の社会課題を学際的にまなざし、分野横断的に科目をパッケージ化したプログラムが展開されている。パッケージ型を選択した学生は、各プログラムの科目リストにもとづいて履修科目を選択し、学修を進めていく。

一方、学修創生型に科目リストは用意されていない。学生はまずマイナー支援科目「分野横断デザイン」を必修科目として受講する。この科目を通して、自身の興味・関心や問題意識にもとづいて探究課題を設定した上で、開講科目の中から自身の学修に適した科目を選択し、体系的かつ分野横断的な学修計画をデザインする。その後、学修計画に沿った科目履修を行い、「分野横断リフレクション」(必修)の受講を経てマイナー修了に至る。

本学入学前からマイナー・プログラムに興味を持っている学生は少なくない。しかし、多くの学生は、各学部で開催される新入生対象の履修ガイダンスで、卒業要件単位数や単位構造の説明とともにメジャー・マイナー制

AAの対応範囲を超える場合、AAは学生に「学生なんでも相談窓口」や保健管理センターなどの学内関連部署を案内し、専門的な支援につなげている(リファー)。

(3)アドバイジングの前提

「学修デザイン相談」でアカデミック・アドバイジングを希望する学生は、マイナー支援科目「分野横断デザイン」で探究課題の設定や分野横断的な探究のあり方を考えることに困難を覚えている場合が多い。授業という集団支援から個別支援への移行に伴ってAAに求められているのは、個別最適なアドバイジングであるといえよう。

そこで、学生自身がもつ「資源」に着目することをアドバイジングの前提として掲げている。「資源」とは、本人の興味・関心や問題意識(社会の現状に対する違和感)のほか、これまでに正課内外で得た経験、人間関係、資格等を指している。学生が自分のもつ資源の価値に気づけていないことが、分野横断的学修を形づくる上での障壁となる。AAは、対話によって思考の言語化を促すとともに、その内容を可視化、整理することで、学生が障壁を乗り越えることを目指す。

(4)アドバイジングの実践例

「学修デザイン相談」は、通常の面談と同じく、①面談の開始、②課題の特定、③課題解決方法の明確化、④行動計画の策定、⑤面談の振り返り、という五つの過程(清水・中井、二〇二二)に沿って行われている。ここでは②と③の過程に焦点を当て、アドバイジングの実践例として紹介したい。

やマイナー・プログラムについて知る。履修ガイダンスを通して学生が得るのは、大学ではこれまでの学校生活のように時間割が定められているわけではなく、自ら受講する科目を決定し、卒業までの学びを管理しなければならぬという学びの主体としての意識である。したがって、マイナー・プログラムの履修について考えることは、学生が「大学でどう学ぶか」を自問する最初の機会といってよい。本学におけるアカデミック・アドバイジングは、こうした学生の問いに対して必要な情報提供を行うだけでなく、マイナー・プログラムの履修を中心に、学生自身の学修目的や将来の目標決定・達成を継続的に支援するために行われている。

アカデミック・アドバイジング体制と「学修デザイン相談」

NICEプログラムでは、二名の専任教員がアカデミック・アドバイザー(以下、AA)を務めている。AAは「学修デザイン相談」という個別相談でマイナー・プログラム履修に関するアカデミック・アドバイジング(個

まず、AAは学生の興味・関心や問題意識に関して5W1Hの問いかけにもとづいた対話を開始する。並行して、学生自身の言葉や表現を尊重しながら、対話の内容をホワイトボードに書き出していく。こうした可視化により思考が整理されると、学生の興味・関心の中心、つまり探究したい課題が立体的に見えてくるようになる(②)。なお、学生が「取るに足りないこと」とみなしていた事柄が、このプロセスで「資源」として価値づけされることは、学生自身が学びの主体としての意識を高める契機ともなる。

探究課題が明確化した後に、分野横断の可能性を考える段階に移る(③)。分野横断のイメージを持ちやすいよう、関連する科目のシラバスを参考にすることもある。AAは、科目情報に加えて学内教育資源(留学、インターンシップ等)について広く情報提供を行うことで、学生が多様な機会を利用して自らの学びを具体的に考えることができるよう支援する。アドバイジングの終了時には、学生が自主的に学修計画の作成に取り組むための材料として、ホワイトボードの撮影を促す。

NICEプログラムのアカデミック・アドバイジングの特徴は、マイナー支援科目と結びつくことで学修支援を重層的に機能させる点にある。今回は「分野横断デザイン」のみの言及となったが、次回はマイナー支援科目と学修創生型マイナーについてより詳しく述べていきたい。

参考文献

清水栄子・中井俊樹編(二〇二二)『大学の学習支援Q&A』玉川大学出版部、二〇二二。



学生自ら編成するマイナー・プログラムと支援科目

新潟大学教育基盤機構 特任准教授 柿原 豪

学修創生型マイナーの必修科目

本書のマイナー・プログラム（以下、マイナー）には「パッケージ型」と「学修創生型」がある。

パッケージ型マイナーでは、学生が各プログラムの科目リストから履修科目を選択し、一二単位以上を取得した上でマイナー修了認定の申請を行う。

学修創生型マイナーでは、「分野横断デザイン」（二単位）と「分野横断リフレクション」（二単位）が必修科目で、残りの十二単位以上の科目リストは、学生が自ら編成する新潟大学独自のマイナーである。

学修創生型マイナーの修了認定を希望する学生は、図1の通り一・二年次に「分野横断デザイン」、三・四年次に「分野横断リフレクション」を履修する。「分野横断デザイン」では、学生は自身の興味・関心、問題意識にもとづいて、マイナーの探究課題および到達目標を設定した上で、それに対応した科目を一二単位以上選び、体系的かつ独創的な学修計画を作成する。自らが設計した学修計画をもとに三・四年次まで履修を進め、学修創生

型マイナーの集大成科目「分野横断リフレクション」でマイナーの学びを振り返り、その成果を可視化していく。

「分野横断デザイン」・「分野横断リフレクション」の学修計画を立てる

「分野横断デザイン」では、受講生が自らのマイナーを編成していくために必要な、学びの興味・関心をゼウリムシ図（ウェビングマップ）に表し、これを教室全体で共有しながら進めていくことを重視している。

そのねらいは二つある。第一に、可視化した学びの興味・関心を他者と共有することで、学びの協働性を高める点である。第二に、授業中のグループワークで得た他者からのフィードバックをもとに、受講生が自分の力で学修計画を作り上げていくことができる自律性を養う点である。

本授業で山場となるのは、マイナーにおける探究課題およびメジャー・マイナーのかけあわせによる到達目標の設定である。授業では、受講生が自身の興味・関心や問題意識をもとに探究課題を設定するように指示しているが、学生にとってそれは容易なことではな

い。また、設定したマイナーの探究課題に対し、メジャーとマイナーでそれぞれいかなるアプローチが可能かといかなる到達目標を設定するかは、学びを体系化する上で重要であるものの、やはりそれは受講生にとって難しい作業となっている。

また、NICEプログラムでは二〇二一年度よりスチューデント・アシスタント（以下、SA）を雇用し、授業担当教員と連携してマイナーの学修支援にあたっている。SAによる支援で受講生が困難を解消できない場合、授業担当教員やSAは、アカデミック・アド

バイザー（以下、AA）による学修支援に導くこととしている。このように、教員とSAによる受講生の把握と授業後の情報共有が重要な意味をもっている。

学生は「分野横断デザイン」を通じて、マイナーの学修計画「マイナー学修デザイン」（図2）として完成させ、さらに探究課題とそれを設定した背景、探究課題に対するメジャーとマイナーそれぞれのアプローチ、自律的な学修を進めるための具体的方策をレポートにまとめて提出し、そこからマイナーの学修を本格化させる。

「分野横断リフレクション」・「分野横断リフレクション」の学修成果を振り返りながら可視化する

マイナーの学修を集大成する「分野横断リフレクション」は、三・四年次生がこれまでのマイナーの学修成果を振り返りながら可視化を図り、これについて他の受講生と協働しながら、自らの学修を意味づけている。そのねらいは、授業を通じて学生が課題解決に必要な知識・技能を主体的に学修する能力としてのエージェンシーについて省察すると同時

マイナー学修デザイン

作成年月日： 2023 年 2 月 4 日（第 3 版）			
学籍番号	****	学部・学科 学年	創生学部 1 年
氏名	****	主専攻	【未定前の場合は、希望するプログラム名を記載】 地質科学プログラム
マイナーの型	☒ 学修創生型 （必要単位数：14 単位） ☐ パッケージ型 （ ）（必要単位数：12 単位） ☐ オナーズ型 （ ）（必要単位数：24 単位） ※ 該当する型に印をつけ、パッケージ型 オナーズ型の場合はパッケージ名、プログラム名を記入		

■マイナーの概要

名称	森林利用による防災
ねらいと概要	近年、森林の整備不足、また地球温暖化による台風の増加や異常気象によって、土砂災害の被害が拡大していることが問題だと感じたため、土砂災害の被害を無くす、減らすといった対策方法を考えたい。そのためにメジャーで学ぶ予定である地質科学を基盤とし、主に森林・林業に関わる分野について学びたいと考えた。この学修創生型マイナーでは授業を自由に設定できるため、自分の目的に合わせて考えた。農業についての基礎知識を習得し、地球規模から見た現在の農業について理解する。上流域の森林から中山間地を経て下流域の水田地帯に至る一連の流域における環境・防災の諸問題を解決し、流域管理の視点を習得する。
到達目標	森林が持つ機能や特徴について説明することができる、地域によって土砂災害に対する課題は異なるため、それに合った解決策を提案することができる。 メジャーとマイナーを用いた複数の観点から、土砂災害の防災・減災を実現するためにはどうすればいいのかを考えることができる。
マイナー学修のキーワード	①森林 ②土砂災害 ③防災 ④
備考	

■学修計画

学修創生型マイナー、およびパッケージ型マイナー「ふるさと共創学」は、下記の2科目が必修です。					
開講番号	学修創生型必修科目	水準	履修学年	単位数	備考
	分野横断デザイン （学修創生型マイナーの必修科目）	01		1	
	分野横断リフレクション （学修創生型マイナーの必修科目）	01	3 or 4	1	※ 分野横断デザインを2年生以上で受講した場合、4年生夏季集中開講を受講してください。
修得予定単位数				2	
キーワード①	森林				
開講番号	キーワードに関連する科目	水準	履修学年	単位数	備考
1	23396508 生態学	04	2,3,4	2	
2	234A0068 森林環境論	04	2,3,4	2	
3	232A0136 フォレストア入門	03	2,3,4	2	
4	230G3939 朱鷺・自然再生フィールドワーク	03	1,2,3,4	2	
5					
6					
このキーワード枠での修得予定単位数（すべての科目の合計ではありません）				8	
キーワード②	土砂災害				
開講番号	キーワードに関連する科目	水準	履修学年	単位数	備考
1	233A0063 流域環境 GIS	03	2,3,4	2	
2	234G3703 土と水	03	1,2,3,4	2	
3					
4					
5					
6					
このキーワード枠での修得予定単位数（すべての科目の合計ではありません）				4	
キーワード③	防災				
開講番号	キーワードに関連する科目	水準	履修学年	単位数	備考
1	231A0060 環境砂防学	04	2, 3, 4	2	
2					
3					
4					
5					
6					
このキーワード枠での修得予定単位数（すべての科目の合計ではありません）				2	
キーワード④	キーワードに関連する科目	水準	履修学年	単位数	備考
1					
2					
3					
4					
5					
6					
このキーワード枠での修得予定単位数（すべての科目の合計ではありません）					
修得予定 合計単位数（ピンク色のセルの合計）				16	履修が重複した場合を考えて、多めに設定した。

図2 マイナー学修デザインの実例

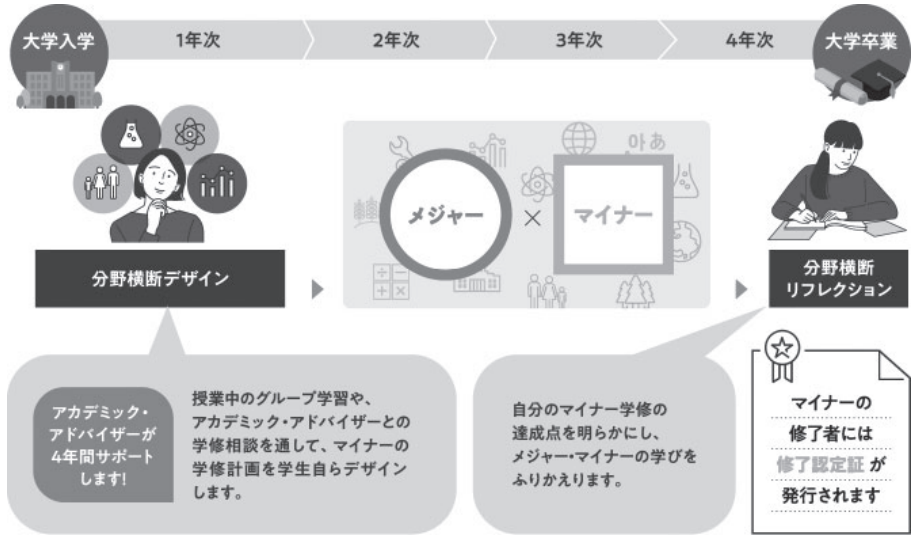


図1 学修創生型マイナーの履修フロー

2023年度第2学期「分野横断リフレクション」NICEカリキュラムマップ

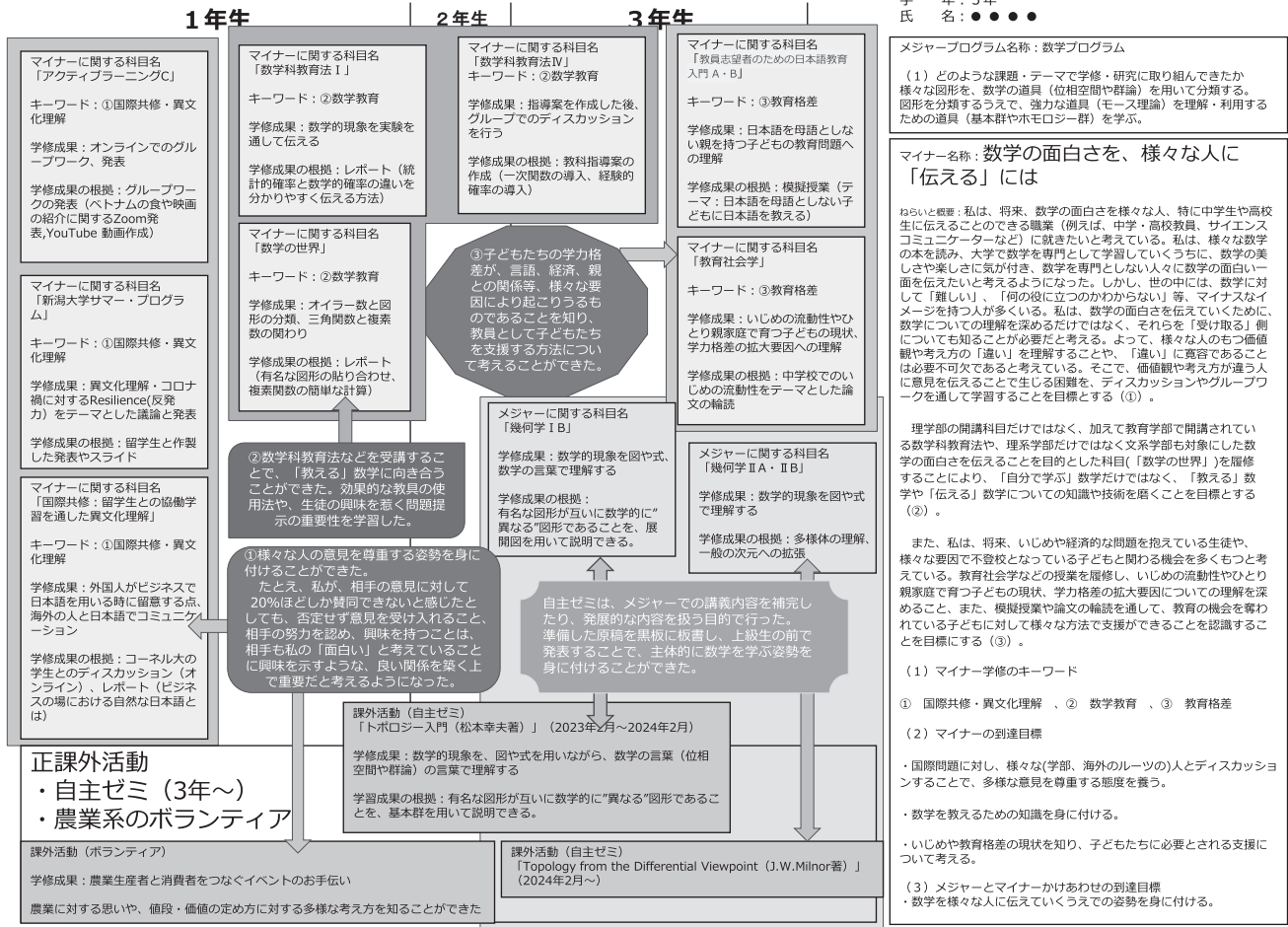


図3 NICE カリキュラムマップの実例

に、自身が学修あるいはキャリアの主体である、という意識をもつことにある。

本授業では、はじめに「分野横断リフレクション」ワークシートの作成に取り組む。それは、受講生が（正課外活動を含む）大学生活全体の学びを通して何を獲得しあるいは達成したか、またその過程における意識の変容を記述することで、その後作成する「確定版マイナー学修デザイン」NICEカリキュラムマップ」（図3）への準備作業となっている。

次に取り組む「確定版マイナー学修デザイン」は、一・二年次に作成した「マイナー学修デザイン」（図2）を参照しながら、受講生の現時点におけるメジャー・マイナーの学びをまとめるものであり、それは自身の成長や意識の変容を実感する機会ともなる。そして、「NICEカリキュラムマップ」を作成することで学修成果を図として可視化していく。受講生がこれらの作業において行き詰まるときと同様に、都度AAから学びの支援を受けられるようにしている。

このように、新潟大学では学生自ら編成するマイナー・プログラムとそれを支援する科目を展開している。今回は紙幅の関係でふれていないが、ルーブリックの改訂や教材の工夫などの課題は多く、次年度に向けてこれらの改善を図っているところである。

図3以外の「NICEカリキュラムマップ」については次のURLから参照のこと。https://www.iess.niigata-u.ac.jp/niceprogram/achievement.html

文部科学省学生支援G P「ダブルホーム」からマイナー「ふるさと共創学」への発展

新潟大学教育基盤機構 准教授 櫻井 典子

本学のパッケージ型マイナーと「ふるさと共創学」の概要

本学のパッケージ型マイナーは令和六年度四月時点で四六プログラムが開設されている。それらは大きく人文・社会科学分野、自然科学分野、保健学分野、学際分野に分類されている。学際分野の一つである「ふるさと共創学」は、後述する「ダブルホーム」における地域活動をおして地域づくりに関心を持ち、地域の思いに寄り添いながら地域や社会における課題を探究し、解決に向けて積極的に取り組む人材を育成していくことを目指して令和四年度に開設された。令和六年三月末時点で五四人が登録しており、六人が修了認定を得た。卒業した三名は、二名が地域にかかわる仕事に就き、一名が大学院に進学した。

あらかじめ作成されている科目リストから一二単位以上を修得してマイナー・プログラム修了となるのは他のパッケージ型マイナー

と同じであるが、「ふるさと共創学」には独自の特徴が二つある。一つは、準正課（卒業要件には含まれないが、新潟大学の教育戦略と教育的意図に基づいて教職員が関与・支援する教育活動や学生支援活動）の地域共創プログラムであるダブルホームをいかして、正課につなげるようにデザインされたものであるということ。もう一つは、学修創生型マイナー（本連載第三、四回参照）の必修科目である「分野横断デザイン」と「分野横断リフレクション」を、こちらでも必修としていることである（図1）。

連載五回目となる今回は、本学のパッケージ型マイナーの一つである「ふるさと共創学」に焦点を当て、その開設以前から取り組んできたダブルホームという準正課教育と、それをマイナー・プログラムとして発展させてきた経緯を解説する。それにより、メジャーをベースにしたマイナー（いわばミニ・メジャー）ではないマイナー・プログラムを編

成する方向性の一つを提示したい。

地域共創プログラム「ダブルホーム」

ダブルホームは、平成十九年度の文部科学省学生支援G Pとして「ダブルホーム制によるいきいき学生支援」事業という名称で開始された。学生が専門の学問を学ぶ学部・学科という第一のホームの他に居場所となる第二のホームで「生活者の視点に立つ地域連携テーマ」に取り組むことで、将来直面する困難な課題に対峙できる力を獲得することを目的とした。G P終了後の平成二十三年度からは、「地域の教育力」を活用して教職協働で学生の汎用的能力を向上させることを目的とした学生支援プログラムとして、令和二年度からは教育プログラムとして継続している（図2）。我が国におけるサービス・ラーニング等の地域を基盤とした学習（コミュニティ・ベースト・ラーニング）の拡がりとともにチームワークやシチズンシップの獲得が求めら

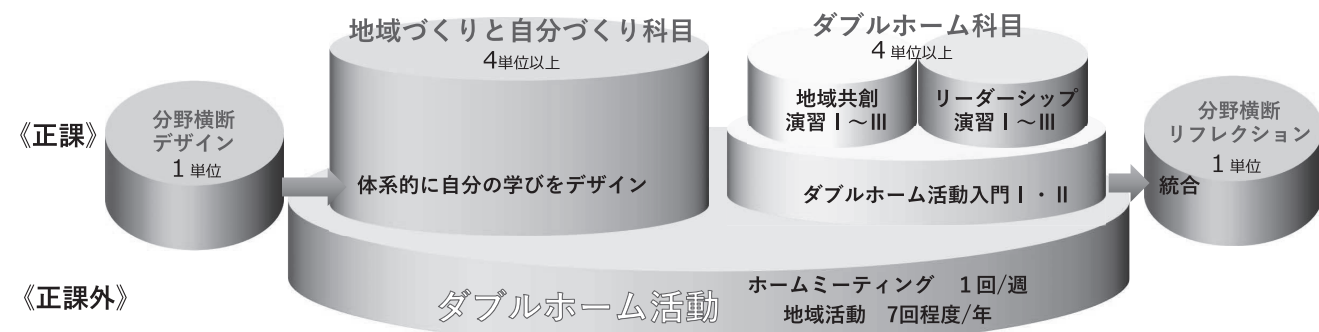


図1 マイナー「ふるさと共創学」とダブルホーム

動が地元の魅力や課題の再認識、地域の子どもたちにとって学生のロールモデル効果、地域の外部とかわる力の獲得や向上につながっている。

マイナー「ふるさと共創学」開設へ

ダブルホームの準正課ならではの悩みの一つとして参加者の活動意欲の温度差が挙げられる。熱心に活動に取り組む学生ほど学習成果意識が高いことから、より多くの学生の取り組み意欲を高めることが継続的な課題であった。第三期中期計画でも「学生の学修に対する主体性と動機づけを高めるために初年次を中心とした長期学外学修と連動した活動」として位置付けられ、教育プログラムとしてのあり方の明示が求められた。松下は、学生の学びと成長に大きなインパクトをもたらす活動として「協働で取り組む課題やプロジェクト」「コミュニティに足場をおいた学習」等があり、汎用的能力教育の先端モデルとして知られるミネルヴァ大学ではこれらのハインパクト実践と正課科目の往還が重視されていることを報告している²。このような流れの中で、マイナーの構築を通して本プログラムを実践活動と正課科目の往還による教養教育プログラムとして発展させることを目指すこととなった。マイナーパッケージ「ふるさと共創学」の誕生である。その可能性が認められ、令和三年度に三菱みらい育成財団の「二十一世紀型教養教育プログラム」として採択され、翌年にはその成果が評価されて

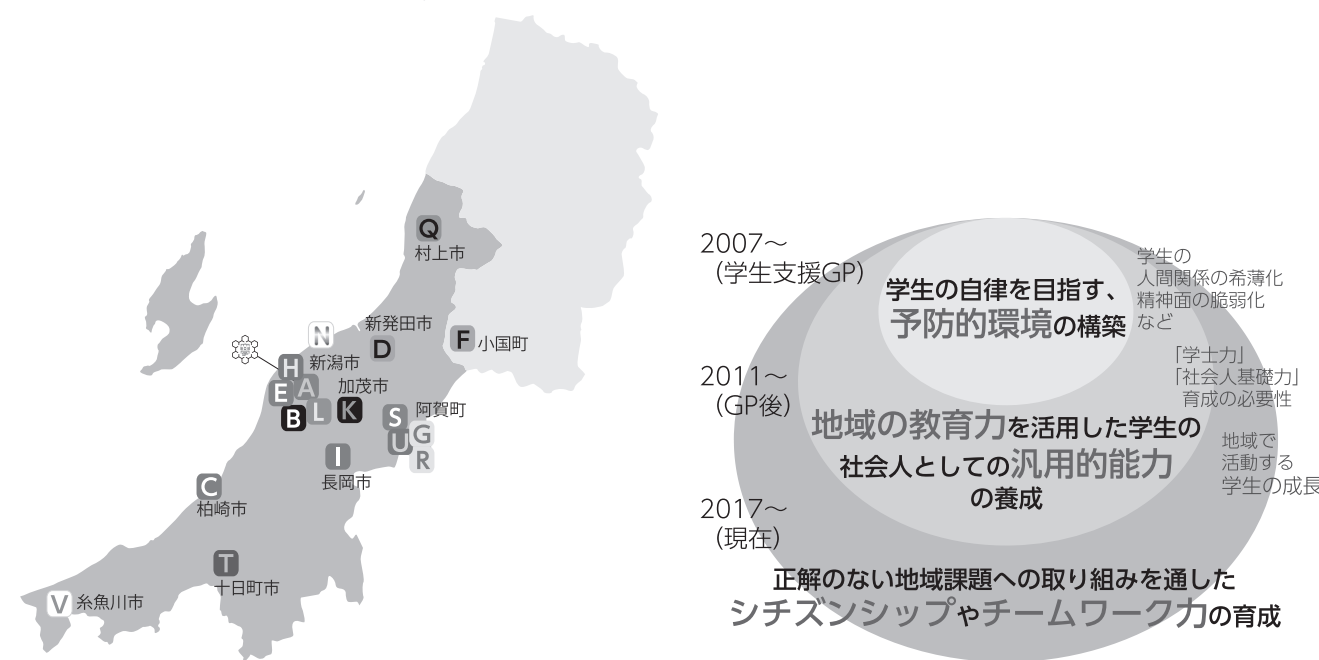


図3 ダブルホーム 18 ホームの活動地域（令和6年度）

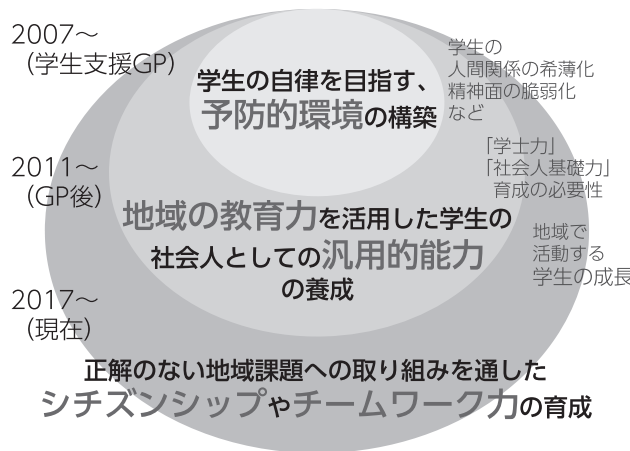


図2 ダブルホームの意義の変化

れる中、現在は以下のように説明している。

ダブルホームは、地域や仲間の思いを大切にしながら、正解のない地域課題に学生・教員・職員によるチームで取り組むプログラムです。地域の思いと向き合う中で「自分たちに何ができるか」をチームで考え、活動を計画・実践・省察すること、これからの社会生活に必要なシチズンシップ（社会に対する責任感）やチームワーク力を育みます¹。

令和五年度は、学生三六七人、教職員六六人が一八ホームで新潟県・山形県で環境保全や行事の維持活動などの地域活動に取り組んだ（図3）。ダブルホームは学生にとって学部を越えた新しい仲間との交流を深める場となるだけではなく、多様な価値観の人々とのふれ合いから生まれるコミュニケーション能力の向上、生活者の立場で社会課題をみつめることで実感する自分の専門分野や新たな知識の必要性和重要性の認識といった様々な効果が認められている。受入れ地域からは、自分たちの地域を大切に思い、共に活動する学生たちの存在は貴重であるという声をいただいている。ダブルホーム活

準グランプリを受賞した。

マイナー「ふるさと共創学」の修了要件は、ダブルホーム科目を四単位以上、地域づくりと自分づくり科目を四単位以上、分野横断デザイン一単位（必修）、分野横断リフレクション一単位（必修）、合計一二単位以上としている。ダブルホーム科目は、マイナー開設前から開講している初年次学生が地域活動の心構えを学ぶダブルホーム活動入門Ⅰ・Ⅱ（各一単位、Ⅱは令和六年度から必修）、イベントの企画・運営を通してリーダーシップを身につけるリーダーシップ演習Ⅰ～Ⅲ（計七科目、各一単位）がある。これらに加えて令和四年度のマイナー「ふるさと共創学」の開始とともに「地域共創演習Ⅰ～Ⅲ」を開設した（計六科目、各一単位）。「地域共創演習」のⅠではチームでプロジェクトを実施するための汎用的スキルを、Ⅱでは地域に入り課題を明確にする調査力を、Ⅲでは地域を深く理解する調査力と社会実装力を受講生が身につけることを目的としている。令和六年度には地域共創アクターと協働するPBL科目「地域共創特別演習」（計三科目、各二単位）も開講予定である。

地域づくりと自分づくり科目は、Gコード科目（学務部教務課が所管する教養科目）や各学部が提供する全学生対象の専門科目の中から一一四科目を選択している。これらの科目から自らの将来像をみつめて自分らしいラーニング・デザインを他者と共に考えるために「分野横断デザイン」を、これまでの大

今後に向けて

ダブルホームでは、学生や地域社会のニーズに柔軟に対応しながらプログラムを改善してきた。参加者の取組への動機づけや意欲には多様性があることは上述した通りである。マイナー「ふるさと共創学」は、課題解決への意欲が高い学生の受け皿として機能している。正課での学びをいかして準正課の活動でリーダーシップを発揮している学生も多いが、より自分らしい活動を求めて巣立っていく学生も少なくない。どちらも成長のかたちであると捉え、そのプロセスを応援していきたい。今後は、段階的に学生たちの地域創生人材としての力を育成するために守・破・離のステップをマイナー「ふるさと共創学」の正課科目と準正課プログラムを往還させながら進めていく。

△引用文献▽

- 1 <https://www.ies.niigata-u.ac.jp/dn/>
- 2 松下佳代「汎用的能力を再考する～汎用性の四つのタイプとミネルヴァ・モデル」『京都大学高等教育研究』二五巻、二〇一九年、pp. 六七―九〇。

※二〇一七年度までの取り組みについては、本誌「新潟大学における特色ある取り組み③」二〇一七年十一月二十七日号、p. 二二―二四もご参照いただきたい。



マイナー・プログラムにおける学修成果の可視化

新潟大学教育基盤機構 准教授 斎藤 有吾

本連載ではこれまで、新潟大学全学分野横断創生プログラム (Niigata University Interdisciplinary Creative Education Program：通称NICEプログラム) について紹介してきた。第六回以降は、紹介してきた取り組みを別の視点から捉え、今後の展望を行っていく。

プログラムレベルの学修成果の評価

近年推し進められている高等教育改革において、「プログラムレベルの学修成果の可視化」は重要なキーワードである。ここでのいう学修成果とは、大学における特定の教育プログラムを通じて学修によって得た知識・理解、スキル、態度などの成果を指す。質保証や教育改善を進めていくために、学生が当該教育プログラムを通して何ができるようになったのかを把握しなければならない。そのため、プログラムレベルの学修成果をディプロマ・ポリシー（以下、DP）に紐づけて評価して

可視化する取り組みが、我が国の多くの高等教育機関において精力的に進められている。

具体的な評価手法として、「アセスメントテスト」や「ルーブリックを用いた」重要科目や卒業研究の評価」などが実施されている。一般に「アセスメントテスト」は授業科目の評価とは別に実施される追加型の評価であり、ペーパーテスト等により学生の資質・能力を測定する方法の総称で、外部団体・企業等が開発したものが多用されている。大学教育における代表的なものとしてP R O G（河合塾・リアセック）やGPS Academic（ベネッセ・キャリア）がある。ただし、これらは汎用的スキルを評価するためのものであり、分野固有の専門的な知識・理解やスキルは射程に入っていない。また、各大学や学位プログラムにおいてDPとして掲げられている汎用的スキルと、これらの標準テストで評価できるものとの間には、齟齬や乖離が生じる場合がある（平山他、二〇二〇）。

「重要科目や卒業研究の評価」は科目の中

が推奨される。

マイナー・プログラムの学修成果の評価

では、マイナー・プログラムの学修成果はどのように評価できるのか。基本的には前述のような評価手法が考えられるが、学位プログラムと同様の課題がつきまとう。例えば外部団体・企業等が開発した「アセスメントテスト」は、四〇以上もある本学の多様なマイナー・プログラムの教育目標を網羅できるものではない。またそのようなテストを、マイナー・プログラムを履修している学生に実施し、特定の汎用的スキル（例えば批判的思考）の到達度を評価したとして、それがメジャーの学修によって到達したのか、マイナーの学修によって到達したのかを判断することは難しい。なぜならばメジャーの学修とマイナーの学修は同時並行で進んでいるからである。

ではマイナー・プログラムの集大成となるような重要科目を設定し、その評価を利用する「重要科目の評価」はどうか。もし全てのマイナー・プログラムにおいて、そのような必修科目を設定し、かつ当該プログラムを修了したい学生が全員履修できるのであれば、プログラムレベルの学修成果の評価が現実的なものとなる。ただしそのような形をとるのであれば、学生がどのような学部あるいは学位プログラムに所属していたとしても確実に履修できるように、いくつかの曜日・時限で複数開講する必要がある。しかし本学のマイ

ナー・プログラムでそのような科目を設定しているのは一部のプログラムにとどまっており、科目の開講や評価にかかわる教員の負担を考えれば、すべてのプログラムでそれを実施するのは現実的ではない。

このような課題を認識しつつ本学のNICEプログラムでは、まだ検討は途上にあるが、マイナー・プログラムにおける学修成果の評価に取り組んできた。以下ではその事例を紹介しよう。

学修創生型マイナーにおける学修成果の評価

新潟大学のマイナー・プログラムの最大の特徴である「学修創生型マイナー」は、学生自身が学修内容や到達目標を設定して科目の構成をデザインしていく自己創生型のマイナーである。学修創生型マイナーでは「分野横断デザイン」（一単位、一・二年次対象）という、マイナーの学修についてのデザインを支援する入門科目と、「分野横断リフレクション」（二単位、三・四年次対象）という、取り組んできたマイナーの学修のみならずメジャーの学修、準正課・正課外の学修を含めて振り返り、分野横断的学修の成果を可視化する集大成科目が必修となっている。両科目を含めて、修了認定に必要な単位数は一四単位である。マイナーの学修の最初と最後に両科目を配置することによって、柔軟な学修と質の担保が両立される設計となっている。「学修創生型マイナー」の学修成果を評価するた

で実施される埋め込み型の評価であり、科目の評価でありながら科目で学んだことだけでなく、プログラム・機関レベルにおける教育目標の達成度に関する情報を提供するという二重の機能をもつものである。卒業研究や卒業プロジェクトはまさにプログラムの集大成であるため、DPと齟齬や乖離なく紐づけて評価しやすい。ただし卒業時点の達成度であるため、経年的な成長をみることはできない。そこでカリキュラムを分節化し、各期の「重要科目」を選んで、知識・スキル・態度を統合的に評価するパフォーマンス評価を在学時に複数回実施している例もある（松下他、二〇二〇）。

他にも、学修ポートフォリオを活用する手法や、カリキュラムマップによってあらかじめ定められた各DPと各科目の対応関係をもとに、各科目の成績を重みづけて集約して各DPを定量的に指標化するなどの手法がある。いずれの手法にも利点と限界があり、これらを組み合わせて相互補完的に用いること

めに、「分野横断リフレクション」（二〇二三年八〜九月）の受講者学生のうち一〇名に対して学修成果を評価するためのパフォーマンス評価、また外的な参考基準としてGPS Academicを実施した。これは先述したプログラムレベルの学修成果の評価方法である「重要科目の評価」と「アセスメントテスト」に対応するものである。

「分野横断リフレクション」において学生に作成を求めた成果物は、①「マイナー学修デザイン」（自身のマイナーの学修の名称、概要、到達目標、科目リスト等）、②「セルフカリキュラムマップ」（メジャー・マイナーにおける科目や準正課・正課外における学修と到達目標を結びつける図や説明であり、現在はNICEカリキュラムマップと呼称）、③「リフレクション・レポート」（セルフカリキュラムマップを参考資料として、分野横断的な視点の獲得や、キャリアを見据えつつ今後に向けた課題解決の展望に関する記述）である。そして①に関して二観点（マイナーに与える名称、マイナー科目群の位置づけ）、③に関して五観点（メジャー・マイナーの学修を通じた課題定義・課題解決、学修成果の把握、学修過程、将来と現時点のギャップ分析、段階的なキャリアプラン）の計七観点、レベル3〜レベル1のルーブリックを作成して（表1）、担当教員四名で評価した。レベル2が合格水準である。教員は互いに相談することなく単独でルーブリックに従って評価した。なお、得られた評価データの信頼性係

表1 「分野横断リフレクション」におけるパフォーマンス評価のルーブリック

分野横断リフレクションー達成点（ゴール）における評価			
	レベル3	レベル2	レベル1
観点1（確定版マイナー学修デザインで評価） マイナー科目群に与える名称	・マイナーとして学んだ科目群に、単位外の課外活動などを含めて、一貫性のある名称を与えている	・マイナーとして学んだ科目群に一貫性のある名称を与えている	・マイナーとして学んだ科目群になんらかの名称を与えている
観点2（確定版マイナー学修デザインで評価） マイナー科目群の位置づけ	・マイナーとして学んだ科目群が、在学中のすべての学び（メジャー学修・課外活動を含む）の中でどのような意味を持っているかについて記述している（位置づけを明確にしている）	・マイナーとして学んだ科目群が、メジャー学修とどう関わるかを記述している	・マイナーとして学んだ科目群について説明をしている
観点3（リフレクションレポートで評価） メジャー×マイナー学修を通じた課題定義・課題解決	・自らが設定した課題を、学修を通じて得た知見を用いて記述し、解決案を記述している	・授業で与えられた課題を、学修を通じて得た知見を用いて記述し、解決案を記述している	・学修と、課題発見・課題解決との関係について記述している
観点4（リフレクションレポートで評価） メジャー×マイナー学修成果のメタ把握	・メジャー×マイナー学修を、課題の発見・解決のための汎用性を持つ手法として捉えなおして記述している	・メジャー×マイナー学修から得られた手法について記述している	・マイナー学修から得られた手法について記述している
観点5（リフレクションレポートで評価） メジャー×マイナーの学修過程	・メジャー×マイナーの学修過程について、協働的な活動結果（学外学習、インターンシップなど）を記述している	・メジャー×マイナーの学修過程について、個人による活動部分を記述している	・マイナーの学修過程について、個人による活動部分を記述している
観点6（リフレクションレポートで評価） ＜目標とする将来像＞と＜現時点における自分＞とのギャップの分析	・現状の到達度について複数の観点から説得力のある記述をしている	・現状の到達度について記述している	・なんらかのギャップを記述している
観点7（リフレクションレポートで評価） 段階的なキャリアプラン	・ギャップ分析と整合する形でキャリアプランを、段階的（3か月後、1年後、5年後など）、かつ具体的に記述している	・キャリアプランを、段階的（3か月後、1年後、5年後など）、かつ具体的に記述している	・なんらかのキャリアプランを記述している

数（評価が一貫しているか、安定しているかの指標。一・〇に近いほど信頼性が高いことを示す）は〇・七を超えており、一定の信頼性を有しているといえるものであった。また、全ての観点に関して平均的にレベル2を超え

ており、学生は合格水準に達していると判断された。

一方、GPS-Academicは大学生の汎用的な課題解決力や大学教育への考えを測定するための標準テストであり、独自の構成概念の定

義と枠組みに基づいて複数の問題や項目によって構成されている。構成概念の大枠と形式は「思考力」（多肢選択式問題、記述式問題）、「姿勢・態度」（アンケート形式）、「経験」（アンケート形式）である。これらはさらに細かい下位のカテゴリに分けられる。例えば「思考力」は「批判的思考力」「協働的思考力」「創造的思考力」で構成されている（ベネッセーキャリア、n.d.）。学修創生型マイナーの学修成果として注目するのは「創造的思考力」であり、メジャー以外の学問分野あるいはテーマを体系的に学ぶことによってこれらが向上することが期待された。その結果、「分野横断リフレクション」受講者（三、四年生）のポイントの平均値は五七・八であった。学修創生型の学修を始めるタイミングにあたる「分野横断デザイン」の受講者（多くが一年生）のポイントの平均値は四九・三であり、「創造的思考力」はかなりの高水準であったといえるだろう。さら

に、データを示すことはできないが、新潟大学と同レベルあるいはそれ以上の偏差値の三年生全受験者の平均値と比較すると、「分野横断リフレクション」受講者の「創造的思考力」はやはり高水準であると判断された。なお、パフォーマンス評価の結果と「創造的思考力」の相関係数は〇・三六であり、弱い正の相関を示した。

これらのことから、学修創生型マイナーにおける学修成果はパフォーマンス評価によって信頼性・妥当性が担保された形で評価されていると判断できる。また、目標とするレベルを達成している。さらに外的な基準を参考にとすると、当該マイナーを履修すること、特定の資質・能力が涵養されていると判断できるものであった。ただし、これは学修創生型マイナーにおける検討であり、他のパッケージ型マイナーにおける学修成果の検討は今後の課題である。

参考文献▽
ベネッセーキャリア（n.d.）「GPS-Academicとは」(https://www.benesse-i-career.co.jp/gps_academic/about/) 二〇二四年五月一日確認
平山朋子・斎藤有吾・松下佳代（二〇二〇）「医療系分野における汎用的能力の評価方法の検討」『大学教育学会誌』四二(1)、一〇五―一一四
松下佳代・小野和宏・斎藤有吾（二〇二〇）「重要科目での埋め込み型パフォーマンス評価を通して科目レベルとプログラムレベルの評価をつなぐ―歯学教育プログラムの経験にもとづく提案―」『京都大学高等教育研究』二六、五一―六四

マイナー・プログラムの質保証

新潟大学教育基盤機構 准教授 樋口 健

本連載ではこれまで、新潟大学全学分野横断創生プログラム (Niigata University Interdisciplinary Creative Education Program：通称NICEプログラム) について紹介してきた。マイナー・プログラムは制度として完成の途上にあるため、その質保証の仕組みもまた構築の途上である。そうした状況を前提に、第七回となる本稿では、大学のマイナー・プログラムの質保証に関する今日までの取り組みを三つ紹介し、今後の展望について述べる。

学びの体系性の確保

一つ目の取り組みは、学びの体系性の確保である。マイナーの学修は科目の幅が広く選択の自由度が極めて高いことから、学びの体系性を確保するためには、履修科目を確定する際に一歩踏み込んだ学修計画の作成指導が重要となる。このための科目が「分野横断デザイン」(一単位)であり、学修の入口において、指導を通じて学びの体系性を図っている。そこでは、学生が自らの問題関心を掘り下げた上で、探究課題と複数の到達目標を設定し、その達成のための授業科目を、シラバ

スを熟考して選択し、学修計画書「マイナー学修デザイン」として確定させる。すなわち、学修計画の中で、探究課題・到達目標・履修科目を整合させ体系性を確保している。また、学修の過程では往々にして学生の興味・関心が変化し、探究課題や履修科目も変化することから、学修の出口に位置する「分野横断リフレクション」(一単位)において、マイナーとして行った学修を振り返り、再度、探究課題・到達目標・履修科目を整合させた「確定版マイナー学修デザイン」を作成させる。これをもって体系化された学修が行われたことを担保し、マイナーの修了認定を行っている。

本連載の中で既に紹介しているように、マイナーには学修創生型マイナーとパッケージ型マイナーがある。学修創生型マイナーはセルフメイドであるため、上記「分野横断デザイン」「分野横断リフレクション」を必修としている。一方、パッケージ型マイナーは、各パッケージが予め示すプログラムの概要と到達目標に応じて定められた科目リストから選択するセミオーダー型であるため、前記二科目は一部を除き必修ではない。科目リストがあるとはいえ選択範囲は広く、学びの体系

化は学生自身の選択に委ねているのが現状である。この点の解消の手立て(パッケージ編成条件として科目の体系性重視、分野横断デザインの履修拡充等)は、今後の課題である。

メジャー・マイナーの重複回避

二つ目の取り組みは、メジャーとマイナーの学びの重複回避である。これは、メジャー・マイナー制が、複数分野の専門性を基盤とする複眼的な視点を備え、それらを掛け合わせで新たな価値を生み出す資質・能力の育成を趣旨とするためだ。このことを踏まえ、本学では「メジャー・マイナー重複可否一覧表」(表1)を作成している。基本ルールとして、学生は自分が所属(または希望)する学位プログラムにおいて専攻する分野(メジャー)と重複するマイナー・プログラムを履修することはできない。

このことを前提に、学修創生型マイナー履修者は、原則として、所属(または希望)する学位プログラムで専攻する分野(メジャー)以外の科目を、「分野横断デザイン」での学修やアカデミック・アドバイザー等との相談を踏まえて選択する。一年生はプログラム配

属前の学生も多く、所属学部内で選択可能な科目の範囲の考え方などについては十分な指導が必要である。パッケージ型マイナーの履修者は、手続きの時点で、所属(または希望)する学位プログラムに照らして、どのパッケージが選択可能なのか当該「一覧表」を確認した上で選択する。パッケージ型の場合、学問分野に沿って作られたミニ・メジャー的なプログラムが多く存在するため、この事前確認が不可欠である。

ディプロマ・サプリメントによるマイナー・プログラムの透明性の確保

三つ目の取り組みは、ディプロマ・サプリメントによる教育プログラムの透明性の確保である。ディプロマ・サプリメントとは学位記等の高等教育課程の修了を証明する文書に添付する補足資料を指す。一般に、学位・資格取得者の情報、学位・資格の基本情報や水準、修了した教育プログラム内容や学修成果等が記載される。学位あるいはそのための教育プログラムの透明性を確保する機能をもつが、日本では学生個人の学修成果を可視化する手段としても用いられている。本学でもディプロマ・サプリメントの構築と検証・運用を進めており、学位プログラムの人材育成目標や到達目標、学修内容、GPA、メジャーの主要な科目の成績等が表示される。

さらに本学のディプロマ・サプリメントの特徴は、マイナー・プログラムの修了認定を受けた学生は、メジャーに加えてマイナー・プログラムやその学修に関する情報も表示されるということにある(図1)。これにより、マイナー・プログラムも含めて教育プログラ

表1 メジャー・マイナー重複可否一覧表(抜粋)									
学部名	学位プログラム名	マイナー・プログラム名							
		心理・人間学	社会文化学	言語文化学	法学	政治学	経済学	数学	
人文学部	心理・人間学プログラム	×	○	○	○	○	○	○	
人文学部	社会文化学プログラム	○	×	○	○	○	○	○	
…									
理学部	数学プログラム	○	○	○	○	○	○	×	
理学部	物理学プログラム	○	○	○	○	○	○	○	
…									

ム全体の透明性の確保を目指している。

メジャー・マイナーを統合した学位プログラム評価の確立

最後に、マイナー・プログラムに関する質保証の展望として、マイナー・プログラムを組み込んだ学位プログラムの評価のあり方について述べる。本学では、学位プログラムを総合的な観点から点検・評価する「学位プログラム評価」を制度化している。この中に、マイナー・プログラムの要素をどのように取り込むかが課題である。

最も重要なことは、マイナー・プログラムにおける学修成果の評価手法の確立であるう。マイナーでは、学生の学びの自由度、個別度が高いが故に、学生の学びの把握を軸とした評価手法の確立が、プログラム改善のためにも一層重要となる(本連載第六回参照)。

マイナー名	自然災害に強い社会形成			
種別	学修前生型マイナー			
修了要件	必修科目「分野横断デザイン」「分野横断リフレクション」2単位を含む14単位以上を修得していること。			
概要と教育目標	以下に記載。			
取得マイナー単位数	20			
マイナーGPA	3.6	マイナー成績平均	86	
マイナー成績平均	86			
履修計画内容の説明	メジャーでは自然災害や防災について幅広く学び、フィールドワーカーとしての素養と実践力を身につける。マイナーでは、メジャーで学んだことをソフト面からの防災に活かす方法を身につける。 … (中略) … メジャーとマイナーの学びを通じて、自然災害・防災と社会の関係について包括的に学び、これらをもとに災害時の人的被害の減少を目標として、ソフト面から現状よりも効果的な防災を実現することを目指す。最終的には「教育」を通して地域社会に貢献できる人材となることを目的とする。			
学修成果の説明	1. 自然災害・防災・社会の関係をハード・ソフト面から理解し、現行の防災の課題を発見できる。 2. 災害に関わる個人・集団の心理を把握し、それらを防災教育活動に活用する。 3. GIS等を用いた分かりやすく効果的な社会や地域への防災教育の方法を修得する。			
マイナー科目のGP/成績	科目名	GP/成績	科目名	GP/成績
	海岸工学		3.8 医療ボランティア論	3.6
	基礎水理学		3.6 臨床心理学概論	3.6
	土地地質学		3.4 GIS概論・演習	3.8
	農村空間デザイン		3.5 GIS概論・応用演習	3.4
	生涯学習概論		3.7 分野横断デザイン	3.7
			分野横断リフレクション	3.5

図1 新潟大学版ディプロマ・サプリメントにおけるマイナー・プログラム(学修創生型マイナー)の表示例

学修成果の把握においては、マイナー・プログラムの到達目標と授業科目との対応関係の明確化、学修ポートフォリオの蓄積を基礎とする到達目標に照らした評価、汎用的能力等に関する標準的アセスメント等が鍵になってこよう。
その上で、学位プログラム評価では、マイナーでの学び(プロセス、成果)がメジャーでの学びにどのような影響を与えたのか、という観点からの評価が必要であらう。そのためには、各学位プログラムの三ポリシーとりわけディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーを、複眼的な視野を育みメジャーの学びにも活かす観点を含むものに変えていく必要がある。しかしながら現時点では、マイナーの学修は任意であるため、これを学位プログラム全体としてどのように実現するか、さらに議論を要する状況である。



メジャー・マイナー制のインパクトと今後の展望

新潟大学 副学長（教育改革担当）・理学部教授 浅賀 岳彦

本連載では新潟大学全学分野横断創生プログラム（Niigata University Interdisciplinary Creative Education Program：通称NICEプログラム）について紹介していく。本学ではメジャー・マイナー（主専攻・副専攻）制を導入しており、NICEプログラムとは、学生のメジャー・マイナー制における学修を支援する取り組み全体を指す。最終回である本稿では、新潟大学におけるメジャー・マイナー制の変遷を振り返るとともに、本学の教育に対するメジャー・マイナー制のインパクトと今後の展望について解説していきたい。

新潟大学におけるメジャー・マイナー制の変遷

最初に、新潟大学におけるメジャー・マイナー制の変遷を簡単に紹介したい。本学は、一〇学部からなる総合大学の強みを活かし、全国の大学に先駆けて平成十七年より「副専攻制度（現在のオナーズ型マイナー）」を導入した。当時、平成十六年に全学科目化、平成十八年には主専攻プログラム（現行の学位プログラム）化が行われるなど、現在の基盤となる一連の教育改革が進められた。令和二

年度に「知的集約型社会を支える人材育成事業」に採択され、令和三年度から副専攻制度は「全学分野横断創生（NICE）プログラム」として大きく発展し、新たに学修創生型マイナーとパッケージ型マイナーが開設された。この点については、本連載の第一回を参照されたい。

近年のメジャー・マイナー制の改革の目標は、より多くの学生がマイナーの学修に挑戦し、そしてその学びを貫徹し修了する学生を増やし、社会課題に複眼的視点で解決に取り組む人材を輩出することである。そのために、学位プログラム化に基づくメジャー・マイナー制の再構築を行った。全学のカリキュラム・ポリシーにおける教育課程編成の基本方針の改定を行い、「各学部、プログラム等の人材育成目標を達成するのに必要な資質・能力を確実に修得させるために、教養教育、専門教育の科目群を 学年進行に沿って適切に配置し、体系的な教育課程を編成します。また、複眼的な視点を備えるために、分野や領域の枠を越えた幅広い学びが可能な体制を整え、そのための学修支援を提供します」と最後の一文を加え、各学部の学位プログラムに

おけるメジャーとマイナーの学びの役割を明確化した。さらに、卒業要件の範囲の中でマイナー・プログラムを修了できるように、オナーズ型マイナーをパッケージ型マイナーへ移行した。

本学の第四期中期計画では、入学者の三分の一がマイナーを履修することを目標にしている。履修者を増やすためには、学生にマイナーの学修の意義とその仕組みを理解してもらうことが重要となる。そのために、紹介冊子「マイナー・プログラム履修ガイド」の配布や、学期初めのガイダンスなどを実施してきた。令和六年度の試みとして、入学式後のオリエンテーションにおいてメジャー・マイナー制について紹介した。この効果は大きく、四月のガイダンスに非常に多くの学生が参加し、中期計画の目標には届かないものの、入学者の約四分の一に当たる七〇〇名（令和六年四月現在）がマイナーの学修を進めている。これは、昨年度に比べて二・六倍に当たる数となる。

また、令和六年度入学者からオナーズ型マイナーを履修停止し、パッケージ型マイナーへの移行を行った。オナーズ型マイナーの修

プログラムの拡充を行った。これらの改革によりマイナー修了者が増えることを期待している。

メジャー・マイナー制のインパクトと今後の展望

最後に、メジャー・マイナー制のインパクトと今後の展望について、触れたい。分野横断的な学修が活性化したことにより、学生として教職員の意識も変わりつつある。このモーメンタムを大学院接続教育の改革につなげたい。文系メジャーを選択した学生が、マイナーの学びにより研究の方向性が大きく変化し、理系メジャーの大学院に入学する。このような専門分野の大変更に対応できる、大学と大学院が連関した教育体制の構築も大きな課題の一つである。そのためには、受入分野の教員と協力し、大学院での教育研究に不具合が出ないように目標設定された、より高度な内容のマイナー・プログラムの開発が必要である。学生が、学士→修士→博士課程と長期にわたる大学時代の中で、学修計画をデザインし、時には変更を行い、やりたい自分を実現できるように、一貫した教育支援体制の構築を試みたい。これらの取り組みにより、分野を横断する学生を軸に、大学院での学際研究が促進されることも期待される。

また、メジャー・マイナー制を進める上で解決すべき課題の一つが、授業時間割の問題である。マイナー対象科目の開講曜限がメジャー科目と重なってしまい、マイナーの学修が中々進まないことがある。ここで鍵となるのが、デジタルを活用した教育である。新潟大学将来ビジョン二〇三〇における教育・

学生支援に関する目標の一つとして、「デジタルとリアルが融合した未来教育の展開」が掲げられている。時間や空間の制約から解き放たれたデジタル教育の拡充が大きな目標である。オンデマンド型のオンライン授業などを活用した、履修しやすいマイナー・プログラムの開発が望まれる。このようなプログラムの構築は、大学の教育戦略上重要な役割を果たすと考える。入門的な内容のプログラムに関しては、リメディアル教育や高大接続教育へ、多言語対応のプログラムは国際協働学修への展開が期待できる。また、リスキリングや社会人の大学院入学のためのリカレント教育プログラムとしても活用できる。

これからもメジャー・マイナー制の改革を強力に進め、リアルとデジタルが融合した教育を確立することにより、社会人学生や留学生を含めた多様な学生に対応できる、地域・世界に開かれた日本海側屈指の教育拠点となることを目指す。

以上のように、新潟大学では、他の大学では類を見ない大規模なメジャー・マイナー制を推進している。この点は、本学の理念である「自立と創生」を体現する教育の基盤をなしている。学生自らマイナー・プログラムを選択し、卒後の人生を見据えメジャーの学びも含め卒業までの計画を立てて、大学での学修を貫徹する。その過程で複眼的視点から、新しい価値・ものを創出し課題解決する力を主体的に獲得し、地域・社会で活躍する人材に成長していく。

是非、今後の新潟大学の教育、そして卒業生に期待していただきたい。

